第III章 古墳群の分布調査の成果

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00060490

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

第Ⅲ章　古墳群の分布調査の成果

1.　既往の調査

1960年代以前の能美地域の古墳群に関する調査の概要は、吉岡康暢氏ほかが中心になって1968年に刊行した『能美古墳群調査概要[1]』に詳しい。

本書によれば、この古墳群に関する記載は、加賀藩政末期の寛政11年、富田景周による『越登賀三州志』に、「能美郡三道山辺にて、神代の古器に似たる者あるいは古兜等を享和中(1801～04年)掘出せしを、医の津田豹阿弥好事の癖ありて、之を乞いて今に蔵す。」とあるのが初見としている。その後、戦前に至るまで、本地域の古墳群に対する本格的な調査はほとんど行われなかった。この時期の能美地域の古墳群についての記載は『石川県史蹟名勝調査報告』に載せる三道山の古墳（寺井山3号墳）や『国府村史[2]』の埴田後山古墳（後山明神古墳群）の須恵器出土の記事等に垣間見る程度である。

本地域における本格的な古墳群の調査は1951年に小松高校地歴クラブによって行われた寺井町和田山1・2号墳の発掘に始まる。その後の調査は、本地域内の中核古墳群であり、前方後円墳1基、前方後方墳3基を含む総数約60基からなる国指定史跡和田山・末寺山古墳群(1975年指定)に関わる数次にわたる調査の他は、1964・1967年の寺井町西山古墳群の発掘調査、1970年の寺井町寺井山遺跡の発掘調査[3]、1975～76年の辰口町下開発茶臼山古墳群[4]の発掘調査、1982年の小松市ムジョウドウ古墳の発掘調査[5]、これらに並行する分布調査、その他の分布調査などと、数える程に過ぎない。しかしながら、これらの調査によって得られた成果は、加賀南部の江沼地域の古墳群との関係を考える上で重要な切石造横穴式石室を持った西山8号墳、初期群集墳としての群構成を明らかにした下開発茶臼山古墳群などにみられるように、非常に貴重なものである。

一方、この地域の中核的古墳群である和田山・末寺山古墳群は、その学術的重要性から1951年の調査以来、開発に伴う破壊に対する、「保存」の立場から、1977～81年の史跡公園整備に伴う発掘調査に至るまで、数次にわたる調査が進められてきた。この77～81年の発掘調査には当研究会も参加しているので、本古墳群の既往の調査について、やや詳細に述べていきたい。

1951年[6]　1949年の小松市西粟津念仏林古墳の発掘を契機とした一連の調査により浮かび上がった南加賀における箱形粘土槨の形態・発生および分布の問題を確認するために、和田

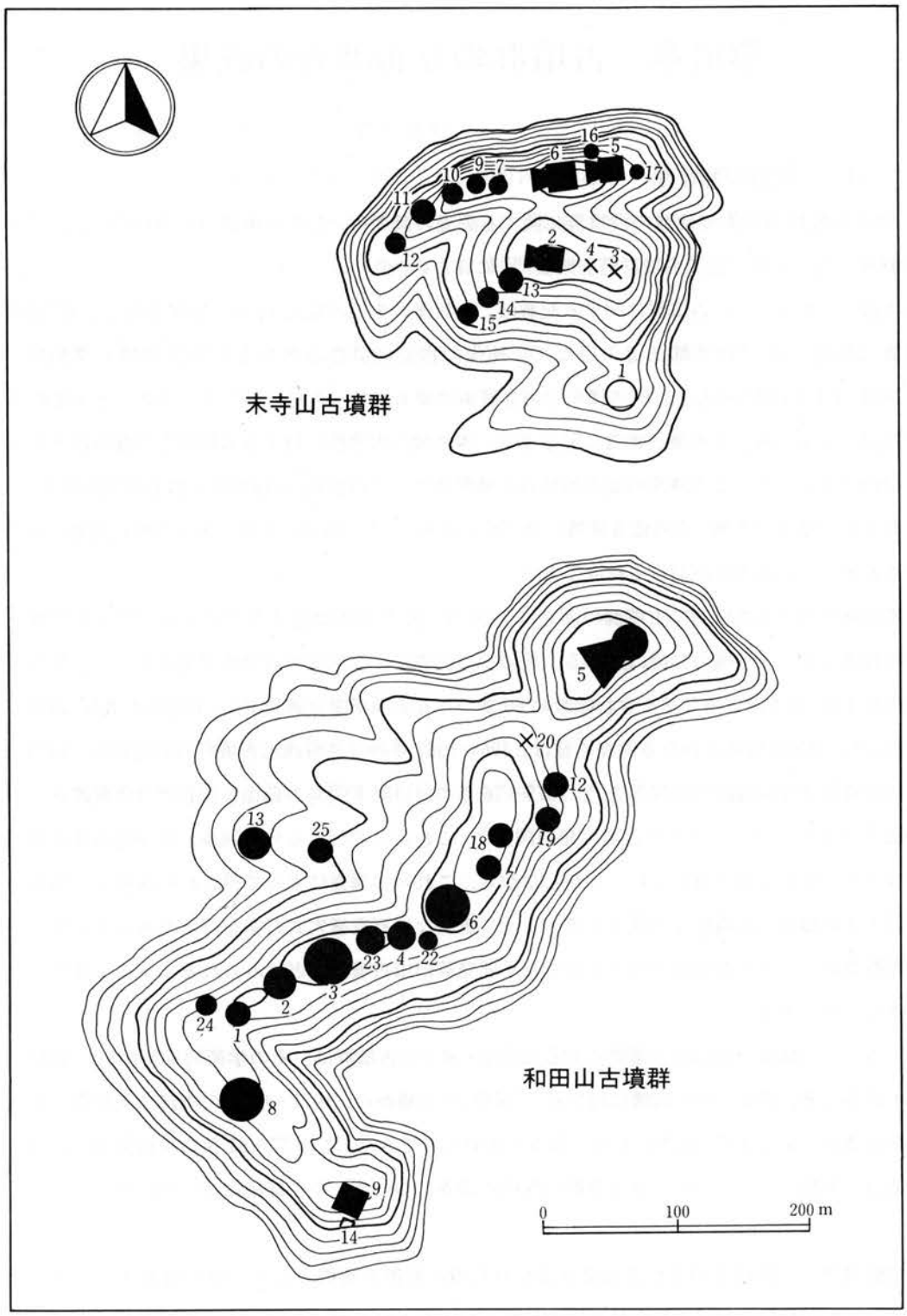

図2　和田山・末寺山古墳群

山1・2号墳が発掘の対象として選定された。

1号墳は長径16.5m、高さ4mを測る楕円形の円墳で、周囲に周溝の痕跡を認めることができ、棺床には朱が塗布されており、径1.2～1.3mの割竹形木棺を持ったものと考えられる。被葬者については、遺存していた下顎の歯列により、5～6歳の幼児であるとされている。遺物は六鈴鏡、刀子、管玉、ガラス玉等が出土している。2号墳は径18.4m、高さ2.2mの、内部主体に粘土床を敷いた円墳で、神獣鏡、武具、馬具などが出土した。

1958年　寺井町文化財保護委員会は、小松高校地歴クラブ、寺井中学校の協力を得て、上野与一氏の指導のもと、末寺山5・7号墳の発掘調査を行った。

5号墳は全長38mの朱を塗り込めた木棺を直葬したと考えられる前方後円墳（1978年の調査により全長29mの前方後方墳と判明)で副葬品には直刀1振が供えられているだけであった。

7号墳は径7m、高さ1.2mの小円墳で、地山を掘り下げて棺床を設け、レキを敷き詰めた箱形粘土槨を内部主体とする。この粘土槨の遺存度は極めて良好であり、構造的特質の究明に貴重な資料を提供することとなった。

1964年　1954年、旧国道8号線の寺井山東端の縦貫による寺井山1・2号墳の消滅に始まり、続いて、手取川の砂利採取規制から寺井町内の独立丘陵が土採り場となり、さらに1961年、町浄水場工事のため末寺山3・4号墳が消滅、同2号墳が半壊した。このような状況のもと、地域開発と文化財保護の問題がにわかに表面化することとなった。この年の北陸大谷高校地歴クラブの和田山5・9号墳[7]の発掘調査も、土採り工事の和田山への波及という、古墳群の破壊の危機に対する事前調査的性格を帯びていたと言える。

5号墳は和田山北半の独立隆起の頂部を占有する前方後円墳で、この発掘によって後円部の2基の粘土槨から多量の鉄製品を始め、北陸では例をみない多様で豊富な副葬品が発見された。本墳は北陸における族長層の性格、5世紀後半における農業技術の変革などを究明する上で非常に貴重な資料であり、この発掘によって本古墳群の価値をも一挙に高めることになったのである。

1968年　この年の発掘は、和田山・末寺山古墳群を始めとする一連の古墳群の保存を前提とする調査の一環として、「古墳公園」の具体的構想に基づいて実施された。

土採りによって崩落の危険がある小円墳―和田山12号墳の緊急調査、分布調査、墳形測量(和

田山3・6・8・9号墳)、発掘調査（6・9号墳）が行われた。またこの時の調査で、9号墳に近接して方形周溝墓―和田山14号墓が発見された。

1977～79年[8]　1975年、和田山・末寺山古墳は寺井町教育委員会の熱心な働き掛けによって、国指定の史跡となった。その後、寺井町は史跡公園整備事業に伴う調査を石川考古学研究会に依頼し、当研究会も能美地域において長年分布調査を行っており、そのため合同調査を行うことになった。

調査は1977～1979年の3ヶ年計画で、まず、1977年は和田山1号墳の復元に伴う基本調査および、1号墳に続く和田山東尾根の古墳の規模・性格を究明するための調査が行われた。その結果、新たに3つの円墳―22号墳、23号墳（西側の周溝内より須恵器高坏43個が規則正しく並んで出土)、24号墳と弥生時代末期の高床式倉庫および集落跡が確認された。

次いで、2年目の1978年には、末寺山5号墳（前方後方墳）の復元と、和田山西側の舌状尾根の古墳の有無を確認するため、発掘が行われ、これまで所在のはっきりしなかった13号墳(円墳）と新たに25号墳（円墳）が発見された。

そして、最終年度の1979年は、和田山6号墳の復元と和田山南尾根にある中世の山城(和田山城）の復元整備に伴う調査が行われた。

6号墳は1968年の調査で切石造の横穴式石室を持つことが確認されていたが、この調査では墳丘を取り巻く周溝に3箇所の掘り残し＝土橋（ブリッジ）が確認され、その解釈に検討を要している。また、和田山城では本丸の部分が2重の囲みによって防御された「複郭式」と呼ばれる特殊な構造を持つものであることが確認されている。さらに、和田山の東尾根では2・4・7・12号墳がこの時発掘調査されている。

1981年[9]　先述の3ヶ年計画に続く和田山5号墳復元のための補足調査として、当研究会は寺井町教育委員会の依頼のもと、和田山5号墳の末寺山2号墳の墳形・規模確認を目的に発掘調査を行った。

その結果、5号墳の規模は全長55m、後円部径26～29m、高さ5.5m、前方部幅47m、高さ3mと変更され（以前は全長63mとされていた)、墳丘周囲には周溝はなく、テラス面をめぐらしていることがわかった。また本墳の年代についても、前方部の盛土から内面すり消しの須恵器甕が出土したことから、5世紀後葉より古くならないことが考えられるようになった。

また従来正確な墳形が不詳のままであった末寺山2号墳は、この時の調査によって、全長31

m、前方部幅 11 m、後方部幅 22 mの前方後方墳であることが確認された。この数値は 5 号墳のそれに近く、末寺山にはこれで 3 基の前方後方墳が存在することになったのである。

2. 秋常茶臼山 1 号墳

寺井町と辰口町の境に位置する西山古墳群の西、寺井町秋常集落北西部の独立丘陵・秋常山（通称　茶臼山）に立地する。加賀地方の現在確認されている前方後円墳の中では最大の規模を持ち、全長約 105 m、後円部径約 70 m、後円部高約 12 m、後円部墳頂平坦面径約 25 m、前方部幅約 53 m、前方部高約 8 mを測る。主軸は前方部を南に、N 19°Eである。

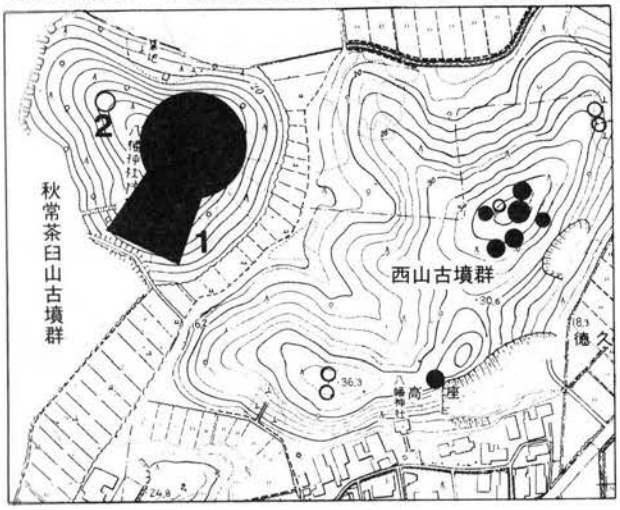

図 3　秋常茶臼山古墳群

墳丘の周囲にはテラス面がめぐり、前方部西側の一部が八幡神社社殿建設のため削られている以外は、墳形の旧状を保ち、とりわけ後円部の保存状態は良好である。墳丘構築に際しては、古墳の立地する丘陵の上部 3 分の 2 を墳丘として用いており、丘陵自体の地形を最大限に利用したものであると考えられる。このことは前方部の社殿建設により削られた土採り面において、人為的盛土が確認されなかったことからも判断できる。外表施設としては、埴輪こそ発見されなかったものの、墳丘全体に密に拳～人頭大の川原石が葺石として存在していることを確認した。

なお、本墳の立地する丘陵の南半部は早く土採りのため消滅し、この部分に古墳が存在したかどうか定かでないが、本墳の北西部、溝状に走る丘陵鞍部を隔てた尾根上には、古墳状の隆起が認められている[10]。しかしその性格は不明である。

墳丘略測の結果からみれば、前方部が全長の 2 分の 1、後円部径が全長の 3 分の 2 にあたり、本墳が一定企画のもとで設計された観を与える。

一定比率を持つ築造企画により築造された前方後円墳の型式論については、上田宏範氏と、椚国男氏による型式分類がある。これらの型式分類を本墳にあてはめると、上田式[11]でいう、A型式（BC：CP：PD＝6：1：2）、椚式[12]でいう、日葉酢媛命陵型II型式（AB：CD：EF＝8：4：4）に属すると考えられる。これらの型式に属する畿内の大型前方後円墳とし

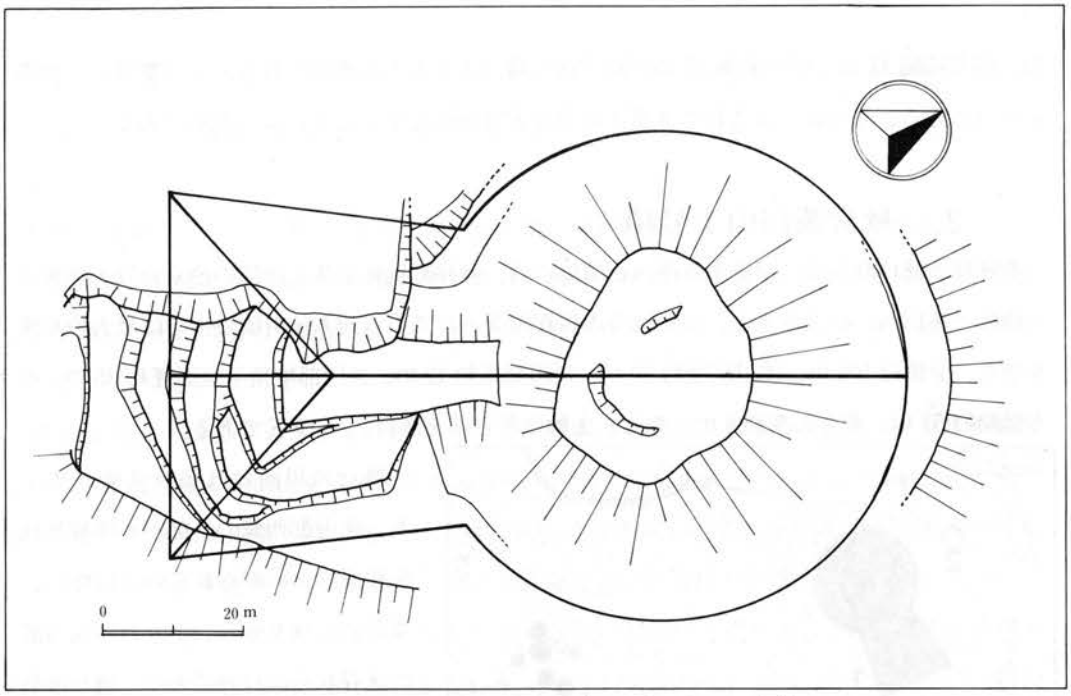

図4　秋常茶臼山1号墳略測図（1984年4月29日作成）

註）　上図における墳丘の推定線は、上田宏範氏の方法に従って、本墳をBC：CP：PD＝6：1：2のA型式前方後円墳として描いている。ここにおいて前方部裾線は、前方部前端幅を全長の2分の1とし、前方部前端面と左右の前方部側面の傾斜は等しいものと仮定して引いた。

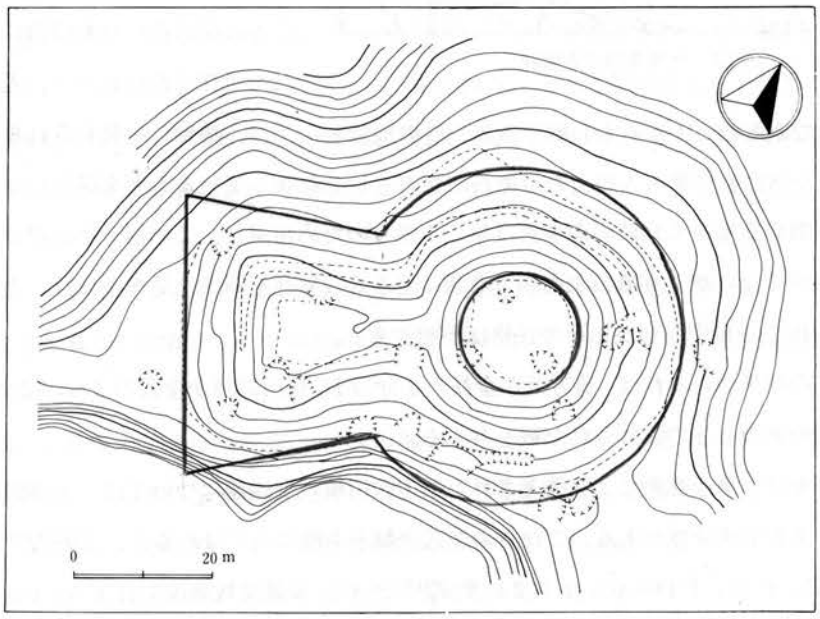

図5　雨ノ宮2号墳測量図（明治大学考古学研究室作成）
『雨ノ宮古墳群の調査』（1978）を一部改変

ては、成務陵古墳（全長約 210 m）、神功陵古墳（全長約 280 m）などがあげられるが、このことは畿内勢力と能美勢力の政治的関係および、本墳の築造年代を考えていく上で重要な手掛かりになると考えられる。

更にこの型式に属する前方後円墳として、能登地方最大の前方後円墳とされている鹿島郡鹿西町所在の雨ノ宮 2 号墳[13]があげられる。規模は秋常茶臼山 1 号墳の 3 分の 2（全長約 70 m）で、葺石を持ちながら埴輪を持たず、丘陵頂部に立地するという、共通の性格を有している。

以上のことはすなわち、加賀・能登最大の前方後円墳である秋常茶臼山 1 号墳と雨ノ宮 2 号墳が、ほぼ同一時期に、同一企画で築造された可能性があることを意味している。このことは当時の加賀・能登、更には畿内との関係を考える上で、注目すべきことであるといえよう。しかしながら、雨ノ宮 2 号墳に対しては墳丘測量のみ、秋常茶臼山 1 号墳に対しては墳丘略測しか実施されておらず、現段階ではその可能性を指摘するにとどめ、今後の調査を待ってさらに検討を加えていきたい。

最後に、本墳の築造年代については、雨ノ宮 2 号墳と同一企画で設計されたか否か、という問題は別としても、その墳形、立地上の特徴、北陸におけるこの種の古墳の出現時期等から考慮して、5 世紀初頭、あるいは前半期に求められると考えられる。

3. 能美丘陵北辺の古墳群

1）来丸古墳群（気多社奥）　辰口町来丸

気多社奥の丘陵尾根上に 2 基の古墳を確認した。1 号墳は尾根最高所に立地する円墳であるが、2 号墳は周溝状の落ち込みが認められるものの、その墳形は不明である。

表 1　来丸古墳（気多社奥）

No.	墳　形	規模（m）		備　　考
		径（辺）	高	
1	円	10×9	1.5	
2	?	?	1.5	周溝状の落込み有り。

表 2　来丸古墳群

No.	墳　形	規模（m）		備　　考
		径（辺）	高	
1	円	16	2.5	
2	円	21	2.5	半壊
3	円	9	1.0	半壊
4	円	11	1.5	半壊

2）来丸古墳群　辰口町来丸

来丸集落南西部の丘陵端部に並列して立地する 4 基の古墳を確認している。1、2、3 号墳の周囲にはテラス面がめぐると思われるが、平野側が一部自然崩落しているため、2、3、4

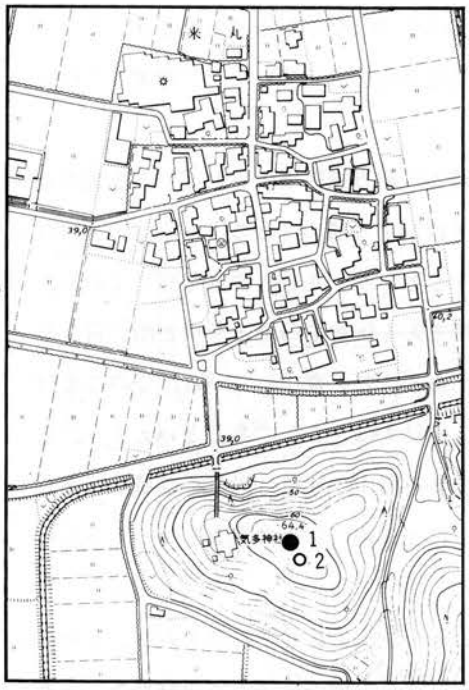

図6　来丸古墳（気多社奥）

号墳は半壊状態となっている。また過去に行った当研究会の調査[14]において、土師器坏片1を採集している。

なお、この古墳の立地する丘陵の西側より大規模な土採り作業が進行している。

3）来丸物見山古墳群　　辰口町三ッ屋

辰口町三ッ屋地内の丘陵北端に立地する3基の古墳を確認している。1・2号墳の北側は自然崩壊により半壊状態となっている。3号墳の墳頂部平坦面に20㎝大の川原石4個を発見したが、その性格は不明である。3基とも墳頂部・墳裾部は不明確となっている。

なお、この丘陵の南側より土採り作業が進行している。

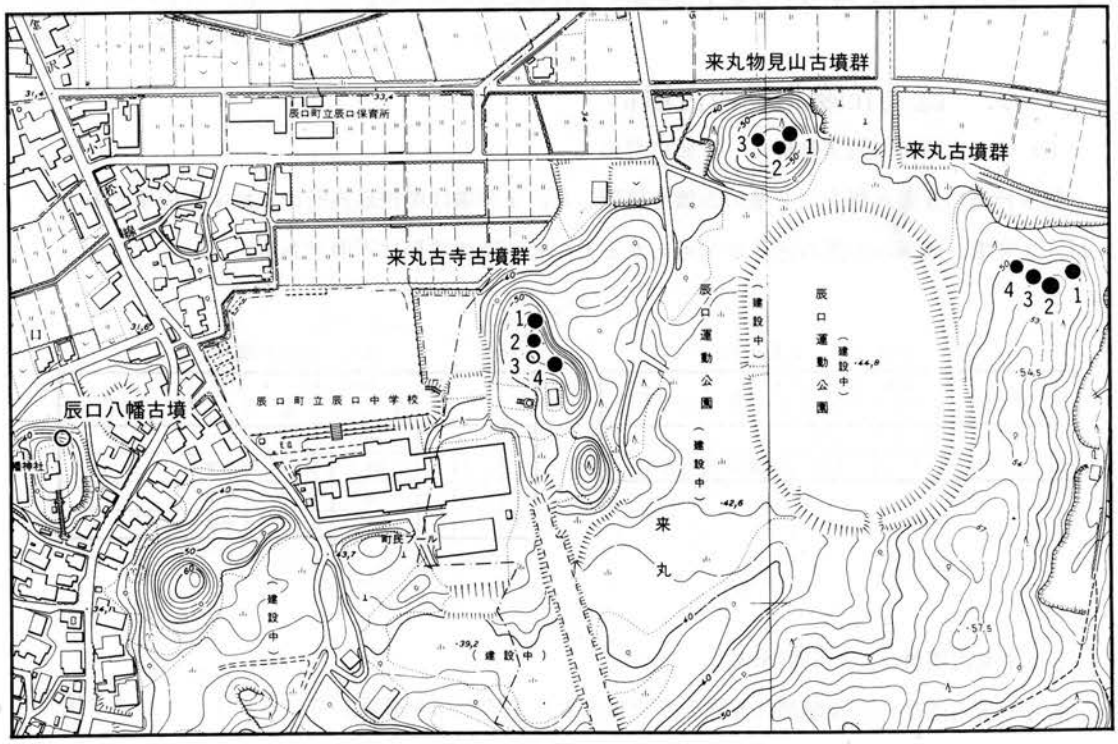

図7　来丸・来丸物見山・来丸古寺・辰口八幡古墳群

4）来丸古寺古墳群　　辰口町来丸

来丸物見山古墳群の南西、辰口中学校の裏手の丘陵上に立地する。丘陵頂部の比較的平坦な部分に4基の古墳を確認した。3号墳は土採りにより崩壊しているが、その土採り面に盛土状の土層が確認されたことにより古墳と判断した。

なお、丘陵の東側からも土採り作業が進行している。

表3　来丸物見山古墳群

No.	墳　形	規模（m）		備　　考
		径（辺）	高	
1	円	9	1.0	半壊
2	円	13	1.0	半壊
3	円	11	1.5	

表4　来丸古寺古墳群

No.	墳　形	規模（m）		備　　考
		径（辺）	高	
1	円	13	2.5	墳頂部に攪乱穴あり
2	円	10	1.5	
3	不明	—	—	裾部のみが残る
4	円	14	0.5	

5）辰口八幡古墳　　辰口町辰口

八幡神社の所在する丘陵尾根上に立地する[15]。土採りにより墳丘の3分の1は削平されているが、その断面に盛土状の土層を確認した。

6）荒屋古墳群　　辰口町荒屋

荒屋集落南部の、平野よりやや入り込んだ丘陵頂部に立地する。円墳5基、墳形不明1基、古墳状隆起1基を確認したが、山の奥地に立地することから中世塚の可能性も否定できない。2号墳では丘陵斜面側にテラス面、4・6号墳では周溝を確認し、3・4号墳間には川原石が散在するが、その性格は不明である。

また、この古墳群から北へ延びる丘陵尾根端部においても、径約8.5mの古墳状隆起を確認している。

表5　辰口八幡古墳

No.	墳　形	規模（m）		備　　考
		径（辺）	高	
1	円？	9？	—	半壊

表6　荒屋古墳群

No.	墳　形	規模（m）		備　　考
		径（辺）	高	
1	円	13	1.0-1.5	
2	円	16	1.5	周囲にテラス面あり
3	円	14	1.0	
4	円	16	1.0-1.5	周溝あり
5	不明	6	低い	
6	円	13	1.0	周溝あり

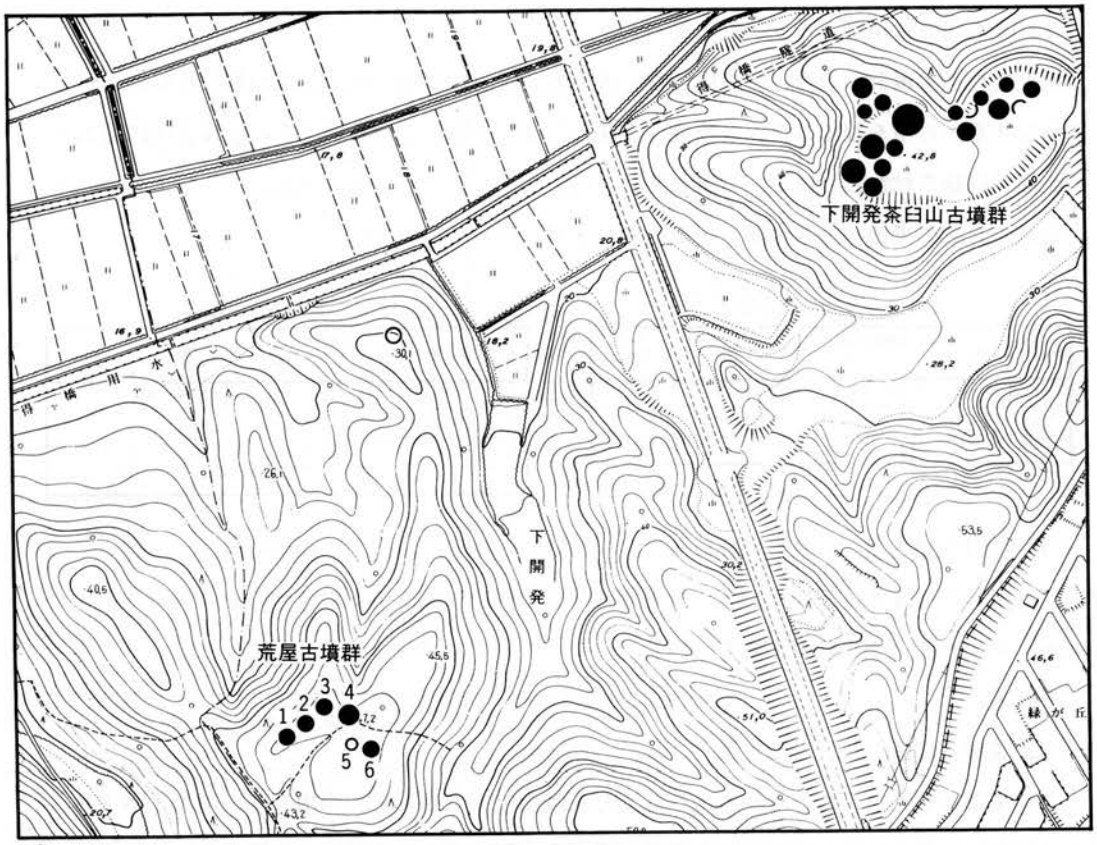

図8　荒屋古墳群

4.　能美丘陵南辺の古墳群

1）河田山（こうだやま）古墳群　　小松市河田～埴田

小松市埴田～河田にかけての東部丘陵上に立地する古墳群。南端の1号墳を始め、平野側に望む丘陵端部に立地するものが多い。

1号墳は当研究会により82～83年にわたり発掘調査[16]が、その他の古墳についてもこれと並行して墳丘略測が行われている。

これらの古墳の構築法として、傾斜の大きい尾根稜線上では、いわゆる棚形の墳丘を持つものが多い。すなわち、平野側への傾斜方向にのみ立体化のための段を作り、広い平坦面を置いてから丘陵の自然斜面に繋げるという、自然地形を最大限に利用した構築法が用いられている。

この構築法に類似したものを持つものとして、金沢市七ツ塚墳墓群A・B支群[17]があげられるが、七ツ塚の場合は外見上、弥生時代の区画墓と全く変わらず、方形を基調としているのに

対し、本古墳群では必ずしも方形を基調としているとはいえず、七ツ塚と比べると、いくらかの墳丘形態上の発展性を窺うことができると考えられる。

本古墳群中で最古に位置づけられるのは弥生時代の区画墓を思わせるような方墳の8、9、14号墳、前方後方墳の1号墳であると考えられるが、現状での墳丘形態・立地状況の観察のみからでは、群全体での年代的位置づけは引き出し得ない。本古墳群の具体的年代決定については今後の調査・研究に委ねたい[18]。

本古墳群は梯川流域における古墳時代の展開を知る上で極めて重要なものであり、今後とも充分な資料を得た上で、さらに検討を進めていくべきであろう。

2）ムジョウドウ古墳　　小松市埴田町

梯川右岸、小松市埴田町の集落裏手の丘陵東端に立地していた円墳。現在は完全に破壊されてしまっている。1982年4月の当研究会による分布調査の際、土採り工事によって半壊中の本墳を発見。その時に排土中から銅製四獣鏡、鉄剣、若干の鉄片を発見した。

同年夏に行われた小松市による発掘調査[19]では、本棺直葬の第1主体部とレキ敷粘土槨の第2主体部が検出され、そのうち第1主体部からは眉庇付兜、革留めの短甲、鉄鏃、メノウ製勾玉等が出土した。

築造年代としては、一応古墳時代前期とされているが、年代決定の決め手となる土器類等が出土していないため正確なことはわからない。同一丘陵上の後山明神古墳群（下記）との立地上の関係等からも検討の余地があろう。

3）後山明神古墳群[20]　　小松市埴田町

ムジョウドウ古墳と同一丘陵上に立地していた古墳群。1号墳からは提瓶・壺・高坏等の須恵器、2号墳からは環鈴、直刀、甲冑、須恵器、土師器が採集された。また、当研究会の分布調査でも器種不明の土師質土器片、須恵器甕の胴部、鉄片若干を採集している。

出土した土器等から古墳時代後期のものと考えられている。

4）御菩提所古墳　　小松市埴田町

後山明神古墳群の立地する丘陵の北麓、畑地上に単独で立地する円墳。直刀が出土したと伝えられている。

5）埴田山古墳群　　小松市埴田町

後山明神古墳群の立地する丘陵の北東向かいの丘陵（通称埴田山）上に立地する。北西方には平地をはさんで河田山を望むことができる。

１号墳墳丘と丘陵尾根とは幅約1.5ｍの溝によって区画され、いわゆる地山削り出しによって墳丘が形成されていると考えられる。

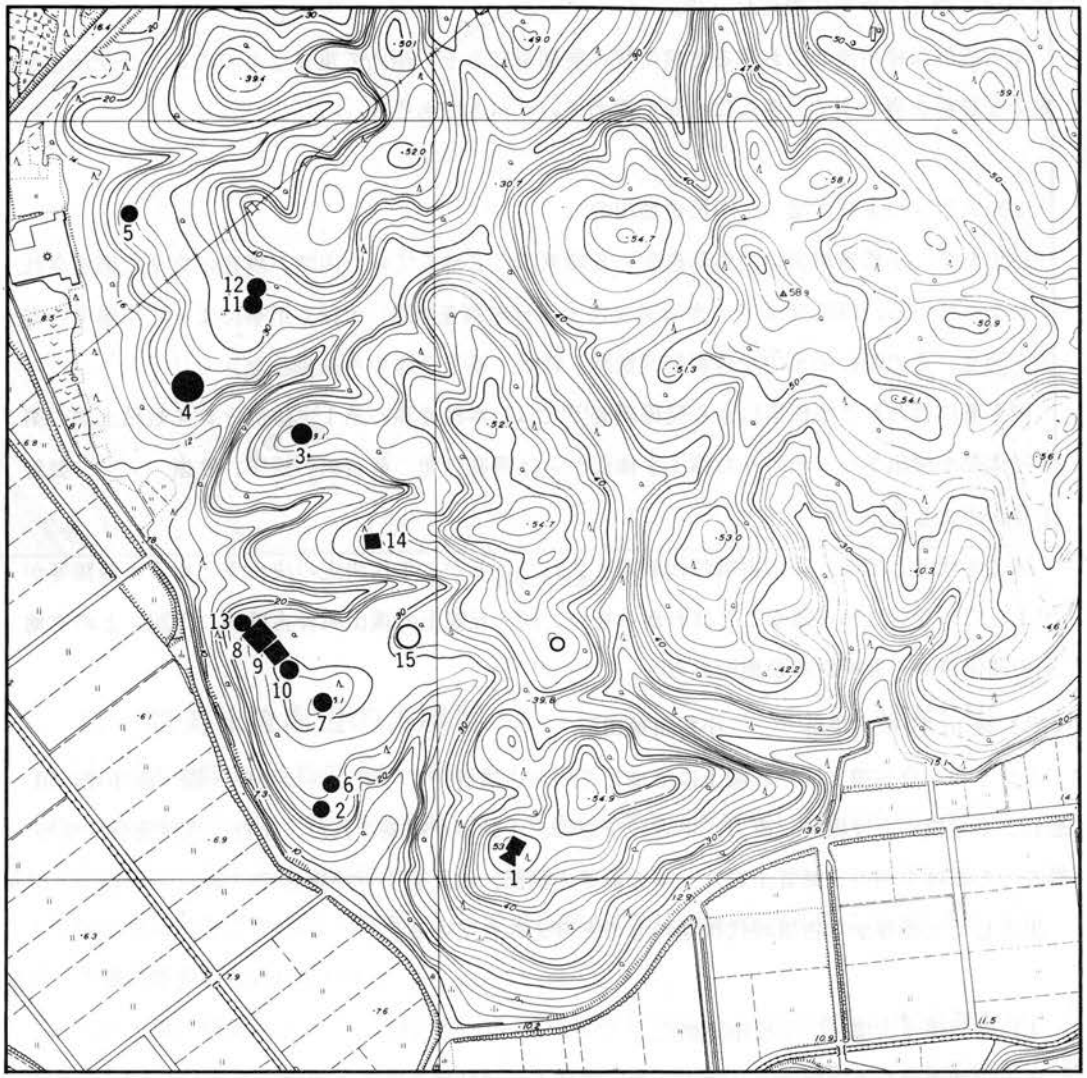

図９　河田山古墳群

表7　河田山古墳群

No.	墳　形	規模（m）		備　　考
		径（辺）	高	
1	前方後方			第Ⅳ章にて詳述
2	円	12×10	1.6	棚状墳丘
3	円	17×16	1.3-1.9	周囲にテラス面あり
4	円	27×23	1.8	半壊
5	円	12	1.3	棚状墳丘。自然隆起？
6	円	12×11	1.3	棚状墳丘
7	円？	18？	1.9	自然隆起？
8	方	21×20	3.3	棚状墳丘
9	方	9×16	1.6	棚状墳丘
10	円？	12	1.3	棚状墳丘
11	円	10×5	1.3	棚状墳丘
12	円	12	1.3	尾根側が削られる
13	円	12×10	2.6	棚状墳丘
14	方	14×16	1.2	棚状墳丘。自然隆起？
15	円？	—	—	裾部のみが残る

表8　後山明神古墳群

No.	墳　形	規模（m）		備　　考
		径（辺）	高	
1	円	—	—	破壊
2	円	?	?	確認できず
ムジョウドウ古墳				
1	円	26	1.5	全壊

表9　御菩提所古墳

No.	墳　形	規模（m）		備　　考
		径（辺）	高	
1	円	10	3.0	

表10　埴田山古墳群

No.	墳　形	規模（m）		備　　考
		径（辺）	高	
1	円	13	2.0	周溝幅約1.5m
2	円	?	?	確認できず

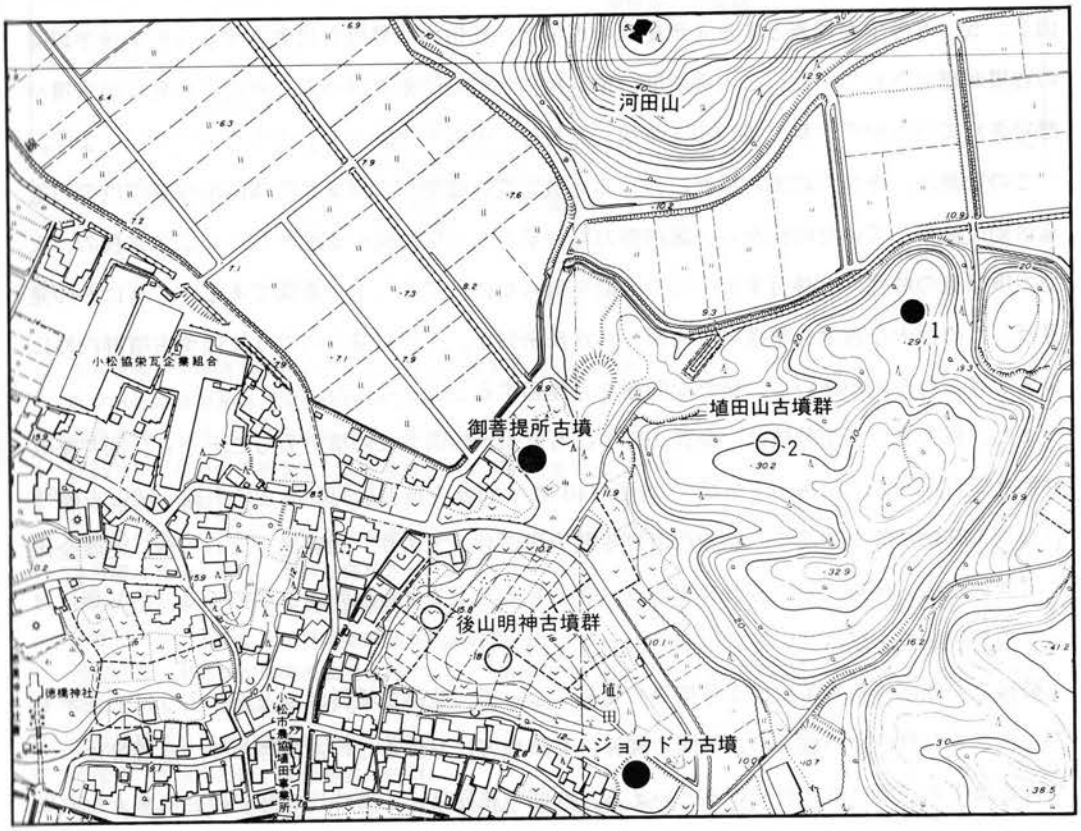

図10　後山明神・御菩提所・埴田山古墳群

5. 小　結

今まで当研究会が能美地域で実施してきた古墳についての分布調査の概要を述べてきた。それらの成果としては、秋常茶臼山1号墳・辰口八幡古墳・荒屋古墳群などの発見があげられる。しかし、分布調査という性格上、個々の古墳の築造年代を確定するに足る充分な資料を得ることはできなかった。

この地域において、その年代観が明確になっているものは、史跡公園整備に伴う発掘調査の実施された寺井町和田山・末寺山古墳群を始めとする、同西山古墳群、辰口町下開発茶臼山古墳群、小松市ムジョウドウ古墳などの、過去に発掘調査の実施された少数の古墳に過ぎない。それら以外の古墳については、既調査古墳との位置関係や、墳丘形態、立地条件の相違からおおよその築造年代を推定するしかない。このように不完全ながらも、今回を含めた既往の調査結果、先学諸氏の研究成果から当研究会なりに能美古墳群[21]の展開を推定、図示したものが図11である。

今回の最大の成果は秋常茶臼山1号墳の発見である。従来より能美古墳群においては、末寺山2、5、6号墳を代表とする4世紀代の古墳と、和田山5号墳を代表とする5世紀後半以降の古墳が確認されていた。この両者間の推定年代の時期的差を埋めるために、未発見の古墳が想定されていたが[22]、秋常茶臼山1号墳の発見は、それを立証するものとなったといえよう。

この発見は、今後、能美古墳群における古墳築造の趨勢が、農業共同体的地縁集団内での造墓活動に終始していた時代から、畿内勢力を背景として広範囲な支配を行った広域首長の、大型古墳築造の時代へと移行する一つの画期を明らかにしてゆく上で重要である。さらにその発見は、この巨大な古墳を築造するに至った首長系列が、それ以降どのように能美古墳群内外に位置づけられるのかという、新たな問題をも提起することになった。

また、秋常茶臼山1号墳は、全長105mにも及ぶ大形前方後円墳であることから、福井県坂井郡丸岡町所在の六呂瀬山1号墳[23](全長140m)、同県吉田郡松岡町所在の手繰ヶ城山古墳[24](全長128m)等と並んで、北陸における最大級のものであり、加賀地方はおろか、北陸全体をも含めた広い視野でその意義を考えるべきであろう。これらの問題については、第V章において若干の論述を試みている。本章と併せて一読されたい。

最後に、今回の秋常茶臼山1号墳等の発見によって、能美古墳群は、上述のように、従来考えられてきた群内での個々の古墳間の関係、北陸地方におけるこの古墳群の持つ意義等について再認識する必要に迫られているといえる。今回の発見は、古墳時代の歴史研究に多大な成果をもたらしたと共に、分布調査というものの難しさをも痛感させるものであった。能美地域は

県内でも遺跡の分布調査がかなり進んでいる地域の一つであったため、なおさらのことといえよう。この能美地域に限らないことだが、充分な分布調査が行われないまま、地下に眠っている遺跡がまだまだ数多くあるのではないだろうか。そして一方、発掘調査の行われた先述の古墳等を除けば、近年のこの地域の開発に伴い、その実体も不明のまま不幸にも消滅していった古墳も少なくないことも考えると、この地域の調査・研究には、まだまだ油断できないものがあるといえるのである。

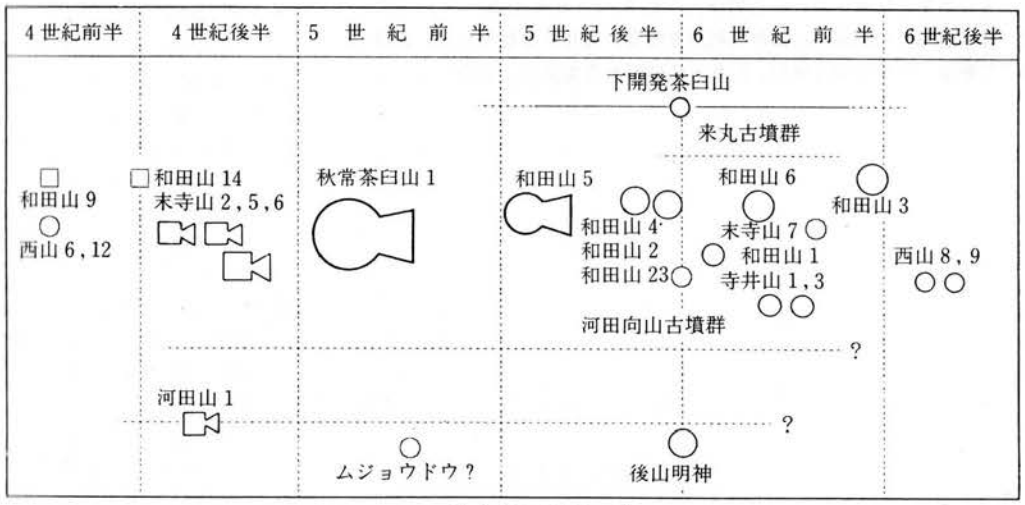

図 11　能美古墳群編年試案

註

1　吉岡康暢他『能美古墳群調査概要』寺井町教育委員会（1968）
2　国府村史編纂委員会『国府村史』（1956）
3　吉岡康暢『寺井山遺跡調査報告書』寺井町教育委員会（1971）
4　西野秀和『辰口町下開発茶臼山古墳群』辰口町教育委員会（1982）
5　小松市立博物館『埋もれた郷土の古代』（1984）
6　小松高校地歴クラブ『石川県能美郡寺井町字寺井和田山古墳調査報告』小松高校研究紀要 5（1952）
7　9号墳は当時、県内で最初に発見された方墳として衆目を集めていた。
8　『和田山末寺山古墳群環境整備事業報告書』寺井町（1983）
9　前掲『和田山末寺山古墳群環境整備事業報告書』
　河村好光「須恵器在地窯の成立をめぐって」『北陸の考古学』石川考古学研究会（1983）
10　秋常茶臼山 1 号墳の陪塚ではないかとの考えもある。
11　上田宏範『前方後円墳』学生社（1979）
12　椚国男『古墳の設計』築地書館（1973）
13　谷内尾晋司・橋本澄夫他『雨ノ宮古墳群の調査』鹿西町教育委員会（1978）
14　金沢大学考古学研究会『金沢大学考古学研究会活動報告・旭台遺跡』（1976）

15　石川県教育委員会『石川県遺跡地図』記載の辰口本寺遺跡と重複する。

16　金沢大学考古学研究会・前田清彦「河田山１号墳第１次発掘調査報告」『北陸史学 32 号』(1983)

17　橋本澄夫・谷内尾晋司『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』石川県教育委員会 (1976)

18　最近の小松市による調査では、河田山２号墳において主体部付近から須恵器の出土を伝えており、本古墳群の造営年代は従来考えられていた時期よりもかなり新しい方へ拡大することが考えられる。

19　小松市立博物館『前掲書』註（５）

20　川良雄編『小松市史（４）風土民俗篇』小松市教育委員会 (1965)
　国府村史編纂委員会『国府村史』(1956)

21　この「能美古墳群」とは、梯川流域に本拠を持つ集団を中心とする広域地域圏内に築かれた古墳群を指す。詳しくは第Ⅴ章の〝河田山古墳群と末寺山古墳群〟に譲る。

22　中司照世「加賀における古墳時代の展開」『古代文化 29―９』(1978)

23　青木豊昭『六呂瀬山古墳群発掘調査概要』福井県教育委員会 (1978)

24　斉藤勇『改訂松岡古墳群』福井県松岡町教育委員会 (1979)